

台湾侵攻7

首都侵攻

大石英司
Eiji Oishi

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～25頁までを収録したものです。

ページ操作について

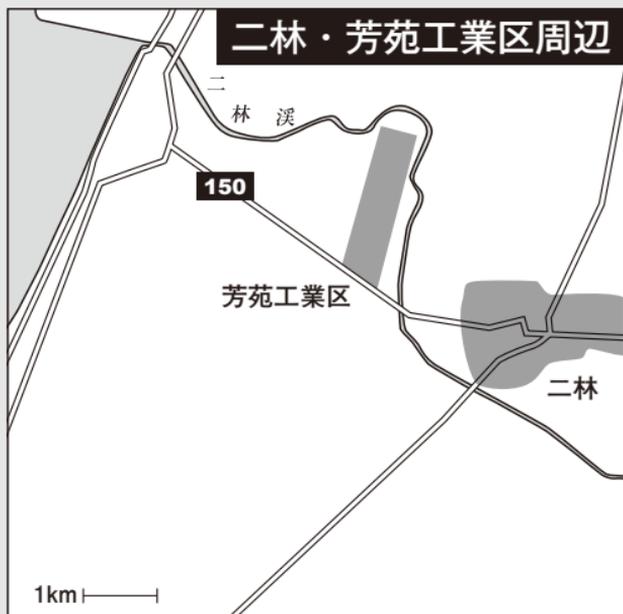
- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画
地図
平面惑星
安田忠幸

目次

プロローグ	11
第一章 オブザーバー	19
第二章 桃園国際空港	39
第三章 襲撃者	63
第四章 若草物語	87
第五章 瓦割り作戦	114
第六章 試作兵器	143
第七章 歩戦協同戦術	169
第八章 民間軍事会社	194
エピローグ	209

二林・芳苑工業区周辺



那覇市

与那国島



竹富島



石垣島

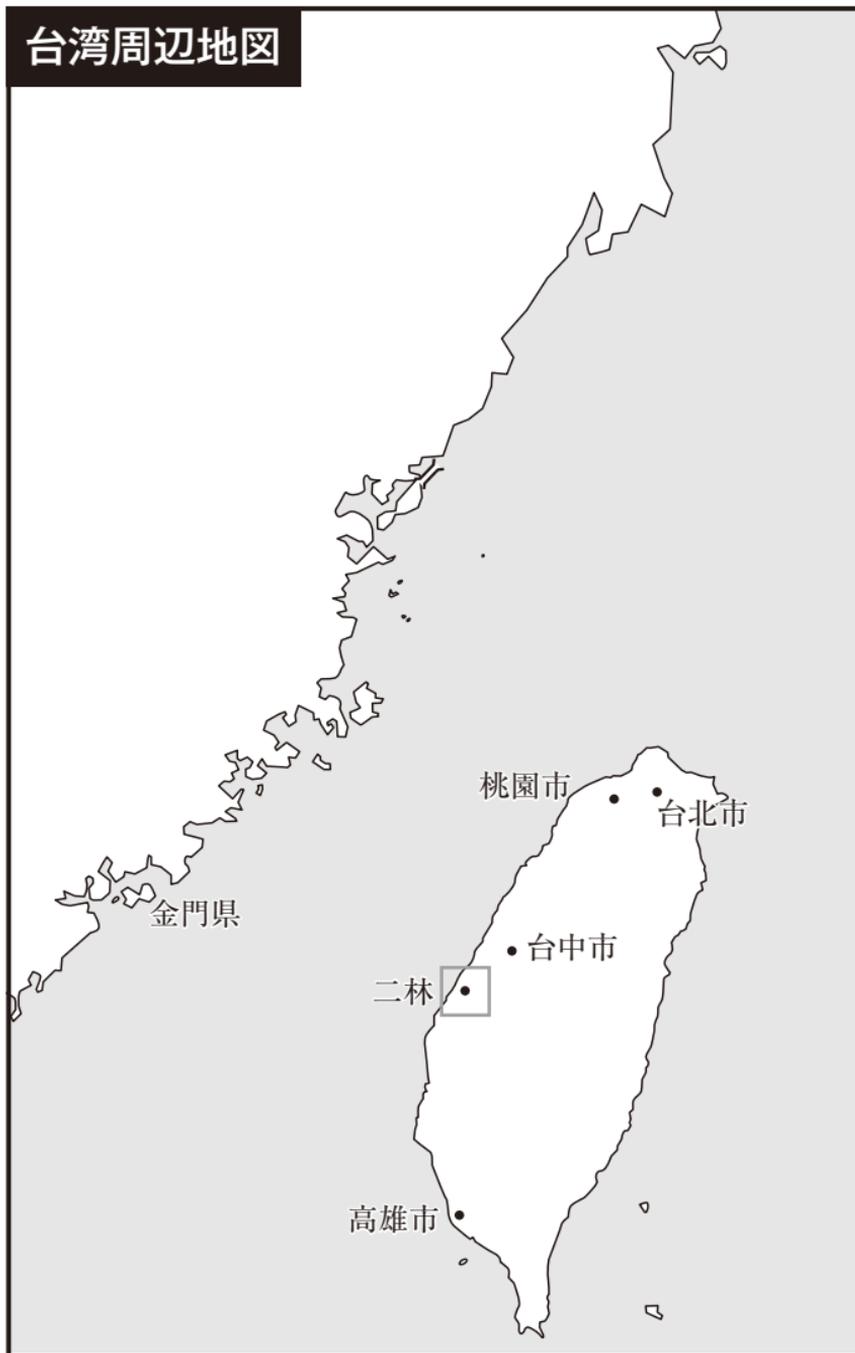


宮古島



50km |

台湾周辺地図



登場人物紹介

◆日本

●陸上自衛隊

《特殊部隊サイレント・コア》

土門康平 陸将補。水陸機動団長。

《原田小隊》

原田拓海 一尉。海自生徒隊卒、空自救難隊出身。

待田晴郎 一曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

《姜小隊》

姜彩夏 三佐。元韓国陸軍参謀本部作戦二課。

福留弾 一曹。分隊長。コードネーム：チェスト。

井伊翔 一曹。部隊のシステム屋。コードネーム：リベット。

《水陸機動団》

司馬光 一佐。水陸機動団教官。コードネーム：女神。

白馬剛 一佐。第一機動連隊連隊長。

《西部方面特科連隊》

岡辺芳雄 一佐。連隊長。

舟木一徹 一佐。戦車隊隊長。

●航空自衛隊

《総隊司令部》

丸山琢己 空将。航空総隊司令官。

羽布峯光 一佐。総隊司令部運用課別班班長。

喜多川・キャサリン・瑛子 二佐。横田出身で、父親が空軍将校で、イラクで戦死した。

《警戒航空団》

戸啓啓子 空自二佐。飛行警戒管制群副司令。ウイングマークをもつ。

・第三〇七臨時飛行隊

日高正章 空自二佐。飛行隊隊長。

新庄藍 一尉。F-15 EX “イーグルII” 戦闘機で驚異的なキル・スコアを上げる。TACネーム：ウィッチ。

・第三〇八飛行隊

桐生昂 一尉。新庄機の危機を救って戦死。TACネーム：コブラ。

宮瀬茜 一尉。部隊紅一点のパイロット。TACネーム：コアラ。

(航空集団)

ひのうえこうた
樋上幸太 空自二佐。P-1哨戒機のパイロット。

●桜会

はまたさちお
浜田左千夫 元陸自三佐。関東エリアBCP（事業継続計画）本部長。

たなかふとし
田中太志 元陸自一曹。八王子センター営業班員。

チェンウーユエ
成五岳 台湾総支社長。日本の大学を卒業後、日本で入社。

●コンビニ支援部隊

こまちみなみ
小町南 女子大生。中国語を勉強中のコンビニのアルバイト。

しもやまゆうすけ
霜山悠輔 桜会のコンビニの助っ人。190センチ近い大男。

///◆アメリカ///

●空軍

エルシー・チャン 少佐。ハワイ州空軍パイロット・中国系。

///◆中国///

●陸軍

《第7空中機動旅団》

ファンセン
方陽 陸軍少将。第7空中機動旅団を率いる。元は武装ヘリのパイロット。

●海軍

・KJ-600（空警-600）

ハオフェイ
浩菲 海軍中佐。空警-600のシステムを開発。

イエファン
葉凡 少佐。空警-600機長。搭乗員六人のうちの唯一の男性。

チェンイー
秦怡 大尉。副操縦士。電子工学の修士号を持つパイロット。

・Y-9X哨戒機

チェンクワイワン
鍾桂蘭 海軍少佐。AESAレーダーの専門家。

///◆台湾///

●陸軍

《第10軍団》

ライルネイン
頼若英 陸軍中佐。作戦参謀次長。

《第234機械化歩兵旅団》=別名〈長城部隊〉

ファンジュエセン
黄九雲 中尉。所属中隊が崩壊し、本部管理中隊所屬に移る。

《陸軍第 601 航空旅団》=別名 ロンチャン〈龍城部隊〉

ランチャーリン 藍志玲 大尉。戦闘ヘリ・パイロット。コールサイン：マリリン。

ティエンズーユイ 田子瑜 少尉。新米仕官。藍志玲大尉と前席射撃手として組む。

●その他

〈桃園の郷土防衛隊〉

リーダワンション 李冠生 陸軍少将。金門の烈嶼守備大隊の指揮官を歴任。

ヤンシージョン 楊世忠 少佐。軍歴三十年で孫もいるベテラン。

〈国土防衛少年烈士団〉

よだけんすけ 依田健祐 父親は日本台湾交流協会参与。私立中学校（国民中学）の生徒。

ガオウェンディ 高文迪 依田健祐の親友。外科医の父を持ち、クラスのリーダー格。

台湾侵攻7

首都侵攻

プロローグ

海上自衛隊・第一潜水隊群そうりゆう型潜水艦
 十一番艦 おうりゆう^ぐ（四二〇〇トン）は、そ
 の巨体を水面上に現すと、沖永良部島沖^{おきのえらぶ}に停泊
 する浮きドックへ向かってゆっくりと前進を開始
 した。

夕暮れが近づいていたが、空はどんよりと曇っ
 ている。このドックに出入りするための注排水作
 業で半日使う羽目になるが、そんな余裕はあるの
 だろうか？ と指揮を取る第一潜水隊群司令の永
 守智之^{もりともゆき}一佐は思った。

潜水艦がドックに収容され排水作業が始まると、
 作業艇に乗った集団が近付いてくる。

半年前に潜水艦隊司令官を最後に退役した平賀^{ひらが}
 貞臣^{さだおみ}元海将がそのメーカーの集団を率いていた。
 この戦争が始まって以来、最も多くの中国軍兵
 士を殺しているのは本艦だった。解放軍海軍の軍
 艦を三隻は沈めた。

おうりゆう^ぐが前回、このドックで修理を受け
 て出航した時は、自衛隊はまだ魚釣島^{うおつり}で敵と戦っ
 ていた。その小さな戦いは、台湾本島の戦争へと
 発展し、しかもその間に日本の政権は交代したの
 だ。

乗り込んで来た平賀は、発令所に詰めるクルー
 に「ご苦労！」とだけ声を掛けると、永守を促し

て士官公室へと直行した。

「哨戒海域から引き揚げてくるだけでも二日は掛かる。これは意味のある後退だったのですか？」

と永守は着席するなり聞いた。

「そのつもりだ。政府というか、海幕も統幕も、この戦争の長期化に備えている。そのために、補給面で万全を期せという命令だ。それが第一と、第二に整備の一環として、前回修理箇所点検と、リチウムイオン電池をそっくり入れ替える。艦装中の艦に搭載予定だったものを持参した。それを半日で入れ替えさせる。パフォーマンスは、従来型の一・三倍だと聞いている。つまりそれだけ長く潜れるし、速く走れる……」

「作業時間は？」

「十二時間を見込んでいる。だから、今度は乗組員を上陸させている余裕はない」

「しかし、作戦の長期化？ 冗談でしょう。安全

圏に離脱してから、通信ブイを上げてあちこちの短波ラジオを聴きました。台中市は非武装都市宣言で白旗、空挺が降りてきて、新竹、桃園と占領され、解放軍は台湾全都市部の九割を制圧。残りは台北のみ。台北市も、街を瓦礫にする前に白旗を掲げるだろうと聞きましたか？」

「大陸のプロパガンダ放送はそんなことを言っていたのかね？」

「自分が聴いたのは、BBCの短波放送ですね。たぶんシンガポールから出している。沖縄の中波も聴いてましたが。これは明らかに負けいくさで、もう一日二日で終わるでしょう。なのに、自衛隊参戦なんて。挙げ句に高雄から上陸とか……」

と永守は絶句した。

「そこはなあ、まあいろいろと事情があつて、玉山山作戦と命名されたのだが、解放軍の戦闘機を誘き出して叩く目的もあつたやに聴く。少な

くとも、うちの部隊は無傷で入港して脱出したし、空の方では台湾空軍と解放軍が刺し違える形になつたが、それでも更に敵の戦力を削ることが出来て、作戦は大成功だと判断された」

「空挺の降下を許したのにですか？」

「戦車が降ってきたわけじゃない。所詮は、身一つの空挺兵だ。彼らには補給すらない。略奪した所で、戦闘継続は三日が限度だろう。中国国内では、ネットがいよいよ台北侵攻だと煽っているよ。うだが、どうだろうな。台湾軍もそこまで無能ではないだろう。これまで地上戦ではあまり良いところが無かつたことは事実だが……」

「次の任務海域に到着する頃には、この戦争は終わっていますよ。われわれの出番はもう無い。それに越したことはないですが」

「最悪の場合は、われわれがこの戦争を終わらせることになるかも知れない。沿岸部の河口に引つ

込んだ空母を沈める形で」

「それで北京が諦めますかね。もう数万の犠牲を払った。たかだか空母の数千人を失った程度では諦めないでしょう。そもそも例のL i D A R装備の哨戒機を撃墜できていないんですよね？ あれは脅威になります」

「撃墜は最優先だ。玉山作戦でも、良いところまでは行つたらしいが、あと一步の所で逃げられた。アムラームを雨あられと撃ち込んだが、最後は海面すれすれに貨物船の隙間を飛び、橋の下を潜つて逃げ切つたらしい。まるで映画を見るような神懸かりな回避方法だったと報告が届いている」

その哨戒機に攻撃されて、おうりゅうは一時的に舵が損傷し、吸音タイルも剥げ落ちた。前回はその修理のためにこの浮きドックへと避難してきたのだった。因縁のある相手だった。

「確かに、一寸先のことは読めませんね。潜つて

いるたった一週間の間に、総理大臣が交替し、『われわれは義によって助太刀する!』と総理が宣言して、堂々と自衛隊が参戦しているんですから。この次潜って浮上したら、世界は核の炎に焼き尽くされた後かも知れない」

「乗組員の士気はどうだね?」

「それは問題ありません。十日前は、われわれは孤独だった。一人で過酷な任務に堪えていた。今は、陸海空全部隊が参戦している。そういう理由で士気は上がっていますよ。味方戦闘機が大陸沿岸部で撃墜されて、脱出したパイロットの救出命令でも来ないものか? と期待する乗組員もいたくらいで」

「それは大いに結構。正直、ここまで過酷な戦争で、味方にまだ一隻の損失もないことは奇跡だよ。今後とも潜水艦隊は無傷で終戦を迎えたいものだ」

「米軍の支援はどうなっているのですか?」

「現状では、ウクライナ方式だろう。戦うのは、台湾軍と自衛隊のみ。しかし武器弾薬の援助に関してはリミットなし。と言っても日本が使う分には実費請求だろうが。海兵隊はこっそりとミサイル部隊を展開しているし、米空軍も小まめに出てくる。ウクライナの戦争よりはマシだ。統幕は、米軍の参戦は日本の活躍次第だろうと見ている。早々に腰砕けになれば、そのまま台湾は共産主義者の手に。自衛隊が奮戦して時間稼ぎしてくれば、その間に、アメリカの世論も動くだろうと。そう楽観できるかどうかは疑問だが。上陸に成功したのもまだ第一陣、水機団ほんの二千人というところだ。台湾人の士気を鼓舞しつつ南から北上して解放軍の背後を脅かす^{おびやか}そうだ。台湾本島に上陸した解放軍兵士は、ほんの三万で、しかも戦車なし。電動キックボードやホバーバイクで翻弄さ

れたが、台湾軍は間もなく態勢を立て直すだろう。たかだか三万の敵に負けるとは思えない……」

「総統府が腰砕けにならない限りはね。例の動画はご覧になりましたか？ 台湾陸軍の女性士官が、戦場取材の外国人インタビューに英語で応じていたそうですが……」

「なんで知っているんだ？ それはほんの二時間前、世界を駆け巡ったばかりホット・ニュースだぞ」

「沖繩の民放ラジオで聴きました。敵に追われて路地から路地へと走りながらインタビューに応じていたが、部下から、これも女性兵士だそうです。郷土防衛隊が逃げ出したと聞いて、泣き出したとか」

平賀は、作業服のポケットからスマホを取り出すと、その動画を再生して見せた。

「ぎりぎり島の携帯電波がキャッチできる所で、

メーカーのエンジニアがダウンロードした動画を貰った。最前線というか、市街戦はこんなものだろう。日本では早速、こんな状況の台湾に自衛隊を突っ込ませて大丈夫か？ みたいな意見は出ているらしい。総統府は火消しに躍起になっているが、民間人の寄せ集めの郷土防衛隊の士気までは手が回らないだろう。われわれが案じてもどうにもならん」

「しかし、ウクライナ国民はもっと強かった……」

「台湾国民だって強いさ。鉄血勤皇隊をモデルに、少年烈士団とかいう少年兵集団を組織して塹壕掘りや補給活動に従事させている。高校生高学年や大学生は学徒兵として動員されているし、私は信じているよ。あとで、乗組員用の戦況報告書を届けさせる。あまりゆっくりは出来ないが、警戒態勢は解いて良い。敵も押しはいるが、われわれ

は確実に敵を削っている。ウクライナ戦争の中盤みたいなものだ。露軍の前進は阻止出来たが、ウクライナは失地の回復は出来ない。だが確実に敵を削っている、みたいな」

「わかりました。その玉山作戦の詳細データは貰えますか？」

「台湾海軍が大きな犠牲を払いつつ敵のミサイル艇部隊にも犠牲を強いた。まだ概略をまとめている段階だろうが、海幕に情報を請求するよ。出航するまでには貰えるだろう。新鮮な野菜と、それなりの特別給食も用意させる」

「陸自を運んだ護衛艦隊はまた本土まで戻るので何か？」

「陸自部隊は民間船舶で那覇へ集結しつつあるから、たぶん那覇と基隆キールンの往復になるだろう。この海域の守りは鉄壁だから。従ってここも安全だ。心配はいらんよ。私はいったん上陸するが、何か

あったら連絡をくれ。晩飯時にまた戻ってくる」
席を立つ平賀の顔には、勝てる戦だと描いてあったが、さてどこまで真に受けて良いのだろうかと思つた。大陸沿岸部ぎりぎりまで進出したものの、あまりの浅海域で往生させられた。またあそこに戻るまで最低二日はかかる。

あれこれ話を聞いた後でも、永守は、戦争は二日も続かないような気がしてならなかった。攻めてきた敵の数や装備の問題では無い。問題は、守る側の意志だ。国民が命を懸けて国を守るという気概を持ってなければ、戦争の決着など簡単につくものだ。

ウクライナはレア・ケースに過ぎない……。そういう確信があつた。そもそもあんな小さな島でだらだら持久戦など無理だ。

船乗りとしては、いったん敵の上陸を許したら終わりだと思つた。それを阻止するための海軍力

だ。

台南本島南西部、香港とを結ぶライン上に位置する東沙島^{トシヤグアイ}に解放軍部隊が電撃上陸してから十九日目が経過しようとしていた。その戦火は、まず尖閣諸島へと飛び火し、自衛隊は国民に事実を伏したまま、魚釣島で凄惨な戦闘を繰り広げた。

隊員を満載したオスプレイの撃墜もあり、七〇名を超える陸自水機団員が戦死した。海自護衛艦隊は、数度に及ぶ飽和攻撃を凌ぎ、魚釣島は護り切ったが、政府は発生した事態の責任を取り、総辞職した。

そして戦場はいよいよ台湾本島へと移行した。解放軍は当初こそ大きな犠牲を出したが、着実に技術と戦術を学び、台湾中部へと再上陸、寡兵ながら新兵器を繰り出して制圧エリアを北へと広げて行った。

中国は同時に、日本の動きを牽制するために、サイバー攻撃によって停電や携帯網をダウンさせ、さらに首都圏へ向けて度々弾道弾ミサイルを撃ち込み、民間人に大きな犠牲を出す状況に至った。台湾の苦境と、国内世論の動向に鑑み^{かんが}、日本国政府はここに台湾防衛への参戦を決定し、その第一陣部隊が、台湾南部の軍港高雄・左營^{スオイン}へと入港し、水陸機動団を上陸させていた。

その日は、夜明け時からこの戦争で最大規模となる交戦が発生していた。自衛艦隊は、中国軍部隊を誘い出すために、わざと台湾島東岸に沿って南下し、南端で大陸側へと姿を見せて入港する形になった。

台湾軍はそれを支援するために、^{おどり} 艦隊を突っ込ませ、台湾空軍も、旧式戦闘機をカミカゼ同様の状況で運用した。

対する解放軍は、その交戦の隙に、戦闘機部隊

の背後から輸送機の大編隊を飛ばし、台北に近い桃園、そして台湾半導体生産の拠点である新竹周辺に空挺兵を降下させた。

台湾全土の九割を押さえたというのは大げさだったが、少なくとも人口比で言えば、都市部の八割前後に、今や解放軍の兵士が展開していた。

台湾の民主主義も独立も、今や風前の灯火状態だった。

第一章 オブザーバー

台湾陸軍第10軍団作戦參謀次長の頼若英中佐と、
ファイルオウ
 軍団司令部本部管理中隊所屬の一個小隊を率いる
ファンジュンヤン
 黄九雲中尉は、軍の旗を立てたステーション・
 ワゴンの後部座席に乗っていた。助手席には通信
 兵。そしてワゴンのラゲッジには、乗員のザック
 と、それなりの量の武器が放り込んである。

中央山脈西側裾野に沿って走る高速3号線を南
 へと走っていた。高速は軍が専用で使っているは
 ずだが、なぜか高雄方面への南行きは渋滞してい
 る。屋根にスーツケースを縛り付けた避難民の車
 が渋滞を起こしていた。

彼女らを先導するパトカーが、時々サイレンを

鳴らして道を空けさせていた。

対向車線、つまり台中へと向かう車線はがら空
 きた。軍の車両しか走っていない。

「九雲、メイク落とし持っている？ 隣国の指揮
 官に挨拶するのに、迷彩ドールは拙ますいわよね。
 せめて女だとわかる程度には落としておかないと
 ……」

と頼中佐は、ようやく現実世界に戻ってきた感
 じで隣の中尉に尋ねた。

黄中尉は、身体をよじり、ラゲッジに投げた自
 分のザックから化粧用ポーチを取り出し、ミラー
 とメイク落としての小さなボトルを手渡した。

「でも良かったじゃないですか。弟さんのご無事がわかって。てつきり、わが海軍は全滅したと思っただのに」

頼中佐の弟は、対艦ミサイルを装備した海巡署の巡視船に乗って出撃した。敵と激しいミサイルの撃ち合いになり、被弾して沈みかけたが、今は高雄へ向けて曳航中だとのことだった。船長は戦死。乗組員にも戦死者が出たが、幸い弟は無事だという報告が届いていた。

「ねえ、私、あのシーンはカットしてと言ったわよね？」

「それは、もう良いじゃないですか？ あのフランス人女性は、大学でジャーナリズムを専攻したそうで、カットせずに公開することが、より真実を世界にアピールできると判断したんですよ。事実、そうだった。CNNは、十五分置きにあの動画を流しているからです。そりゃ、総統府や

国防部はおかんむりでしょうけれど、この惨状が世界に知れ渡り、国際社会での同情も得やすくなった」

「郷土防衛隊はかんかんよ？ 軍団長もなんてことをしてくれたんだと、私を前線から離脱させて外国軍のお守りなんかさせて……。あのフランス人はどうして台湾を脱出しないんだろう」

「兵は喜んでますよ。ここ数日の戦いは過酷だった。休息は必要です。彼女は、生粋のパリジャンだそうですが、母親はアメリカ人、父親は、ソヴェイトが崩壊する直前、ウクライナから亡命して来たんだそうです。ウクライナで戦争が始まると、自分はどう戦場に戻れる歳ではないとがっかりしたそうで……。両親とズームで話したら、人間として恥ずかしくない行動を取れ、そこで暮らす人々を助けるべきだと……。それで残つたらいいです。郷土防衛隊が持ち場を捨てて逃げ出したの

は事実ですからね。あいつら今頃、解放軍を出迎えるための五星紅旗でも作ってますよ」

頼中佐は、戦場取材のひとつという形で、語学教師として台中市で暮らしていたフランス人女性のインタビューを受けていた。ところが近くに解放軍兵士が展開していることがわかり、戦鬪が発生し、路地から路地へと走りながらの緊迫したインタビューになった。

そんな中で、集落を守っていた郷土防衛隊が逃げ出し、その事実を黄中尉から聞かされた頼は、言葉に詰まってすすり泣きを始めてしまったのだ。ここはカットしてくれと頼んだが、動画はそのままネットに上げられ、あつという間に世界を駆け巡った。

軍は、激昂状態だった。田舎の素人の寄せ集めとは言え、郷土防衛隊が逃げ出したことにも、その事実を認めた動画がアップされたことにも。

「解放軍に知られてしまったじゃない。国民の士気は低いと」

「それはでも事実ですからね。ここで戦っている解放軍兵士が一番良く知っていることでしょう。今更隠すことでも無い。せいぜい塹壕掘りや検問所での警備作業のつもりで駆り出されたのに、軍隊が脱出するための時間稼ぎの戦鬪を命じられたら、それ彼らも怒るでしょう。話が違つと。いくら兵役経験者と言つても、普段は仕事もあれば家庭もある民間人なのですから」

南側からパトカーが一台走ってくる。それに続いて、陸軍の迷彩服とは違う戦鬪服姿の兵士が乗るバイクが二台走ってきた。後ろの旗竿に小さな日の丸の旗がくくりつけてあった。自衛隊の登場だ。

「ブロックが外されている場所まで走つて対向車線に出てちょうだいな」

センターラインの代わりに車止め用のブロックが中央に置かれている。戦争が始まってから、そのブロックが何カ所もずらされていた。軍の往來を自由にするためでもあったが、敵が高速上ですっ飛ばすのを阻止するために、わざと道を細くする目的もあった。

それが渋滞の原因にもなっていた。

先導役の陸軍のハンヴィーが現れたので、中佐は自ら止めて、援軍の指揮官はどこに乗っているのだ？ と聞いた。

たぶん、ブッシュマスター装甲車だろうということだった。路側帯に避けてブッシュマスターが現れるのを待つ。

AAV7装甲車が一五〇メートルほどの車間距離を取って通過していく。巨大なというか、そびえるような装甲車だ。うちの海兵隊も持つてはいませんが、こんなものが水に浮くとは俄には信じられ

なかった。

全車両が、小さな日章旗と、台湾国旗である青天白日旗をラジオ・アンテナに結んでいた。

車列のかなり後方に位置していたブッシュマスター装甲車が二台現れる。頼中佐は、三車線道路の中央に仁王立ちして右手を掲げ、止まるよう指示した。

ブッシュマスターは優れた装甲車両だが、運転席にドアはなく、分厚い防爆窓も開け閉めする前提の構造ではない。

ルーフの機関銃座から顔を出した兵士に、指揮官はどっちに乗っている？ と英語で尋ねた。

兵士は自らは答えず、いったんインカムで誰かに尋ねた後、「後ろの車両です」と敬礼した。驚いたことに、英語ではなく北京語だった。

後続のブッシュマスターは、これも一〇〇メートルは離れた場所で止まっていたが、ようやく動



き出した。マニュアルでそうすることが決められているのだろうか、用心深い部隊だと思った。

この状況下では、高速沿いに敵のコマンドが潜んで仕掛けてきても不思議はないのだ。

後部のハッチが開いたので、頼中佐は、姿勢を正して敬礼した上で、自分は第10軍団から派遣された連絡将校であり、指揮官がいらしたら、乗車の許可を貰いたい、と英語で述べた。

八、九人は乗れるはずのキャビンには、運転席の背後両サイドに通信コンソールが設けられていたが、インカムを被る兵士の他には、指揮官らしき男性が一人乗っているだけだった。参謀スタッフはどこだろう……、と怪訝に思った。

陸上自衛隊・特殊作戦群第一空挺団第四〇三本部管理中隊、その実特殊部隊「サイレント・コア」を率いる土門康平陸将補は、「カモン！ カモン！」と手招きして二人を乗せた。便宜上、今は

土門が水陸機動団の団長でもあった。

「失礼します！」

土門は、階級章を隠すベルクロをちらと捲って見せた。

「土門だ。よろしく」

黄中尉がハッチを閉めるとブッシュマスターはまた隊列に戻った。

「部隊の皆様を歓迎します、将軍。英語で失礼します。何より、困難な任務に就いてくださったことを感謝申し上げます」

「うん。まさに任務だからね。全力を尽くして、解放軍を台湾から追い出そう！」

と土門は外交的な笑みを浮かべ、英語で応じた。「早速ですが、参謀スタッフの皆様はどちらに……」

「そうだな。ワゴンか、バスではないかな。全滅を恐れて、ばらけて乗っているはずだが……」

「では、將軍の副官というか……」

「ああ、副官はいないなあ」

「この人たち、例の部隊ですよ！」

と黄中尉が耳元で囁いた。

「例の？……」

「ほら、濁水溪ジュオシユイシでわれわれを間一髪で救ってくれた——」

頼中佐は緊張していて気付かなかったが、確かにそうだ。彼らの戦闘服は、ニュース等で見る水機団のそれとは少し違うような感じがした。何より、足下に置かれている銃は、八九式小銃でもなく、S C A Rをパクったと非難された二〇式小銃でもない。Hk 416の系統だ。それも、恐ろしくカスタマイズされている。サプレッサーまで迷彩。しかもカムフラージュ用の布きれがあちこち巻かれている。

將軍の傍らには、擲弾発射基が無造作に置かれ

ていた。

「あの特殊部隊のことを言っているの？」

と頼は早口で言った。

「絶対そうですよ！ この装備は水機団じゃない」

「ああ！ 君らだったのか！」

と土門は突然北京語に切り替えた。

「確か、うちの小隊が全滅しかけていた第10軍団の指揮所を救った。そこにやり手の女性の中佐がいたと報告を受けている。君のことだったのか。いやあれは、大変だったぞ！ もう全滅は不可避と判断して、私は部隊に下がるよう命じたのだが、その直後、味方のかどうか航空自衛隊の前線航空管制員F A Cが敵陣後方に降りた。爆撃を誘導できるといふ連絡を受けて、また引き返すよう命じた。こちらのF A Cは戦死したが、君らが助かって何よりだ……」

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。